

日経MJ 2016年 10月 26日付

がん新薬「オプジーボ」なぜ高い

高額の新薬の医療財政負担が大きな話題になっている。

小野薬品工業が発売するがん新薬のオプジーボは、年間約3500万円かかるという。その大半は本人負担ではなく、医療保険でカバーされることになる。当初は皮膚がんの一種に限られた利用を想定していたので、約5000人の利用で31億円の薬剤費という計算であった。

ただ、肺がんへの適用範囲拡大を行っており、そのでの利用者は最大で32倍の1・5万人の利用、薬剤費は1260億円という計算となる。将来はさらに他のがんにも利用される可能性があり、推定では最大5万人の利用、薬剤費は1・75兆円になる計算だ。

画期的な新薬が開発され



伊藤元重の

エコノウオッチ

ることは結構なことだ。しかし一つの薬で1兆円を超えるようなことになれば、医療保険制度の根本を崩しかねない。効果の大きな薬を、どうやって患者に届けるのかということが大きな課題となる。

オプジーボは、100ミリで約73万円という価格だ。これは5000人程度の利用を想定した価格設定だ。医薬品の場合には研究開発に膨大な資金がかかる。これを5000人程度の利用で採算を合わせるためには73万円という高価格が必要ということだろう。

とはいえ、利用者が1万人を超えるような想定となつたとき、それでも価格が同じというのは理屈が通らない。少し乱暴な計算だが、コストの大半が固定費である研究開発費であるなら、

薬価制度の問題表面化

利用者が30倍になれば、価格は30分の1に下げてもよいようにも思える。

興味深いことに、日本で開発した薬であるにもかかわらず、海外では日本より安く売られているようだ。日本で100ミリで約73万円だが、英国では約15万円、米国では約30万円で販売されているという。海外で安く売られていることが問題であるというより、利用が増えたにもかかわらず、値段が下がらない日本の価格制度が問題であると考えなければならないだろう。

こうした事態を受けて政府はオプジーボの価格を下げる方向で検討しているようだ。これはオプジーボという薬だけの問題ではない。画期的な効果の高額の医薬品が出てくることで、日本の薬価制度が抱えるいろいろな問題が表面に出てくる結果となったのだ。

2年に1回しか薬価を

部教授)

更しないというスピード感で、技術革新に対応できるのか。高額の新薬が次々に出てきたとき、それを全て現在の制度で吸収できるのか。どの薬を保険の対象にするのか合理的な判断が行われているのか。高額な医薬品の費用負担が問題となる一方で、薬局で買えるような湿布剤や風邪薬を医療保険で負担することではないのか。

外からは合理性が見えにくい、日本の薬価制度の様々な問題が垣間見えるように思える。オプジーボの問題は、氷山の一角にすぎない。これをきっかけに、日本の薬価制度が抱える様々な問題を根本から検討し、改革が行われていくことを期待したいものだ。現在の医薬品事情に合わせた日本の薬価制度の見直しが必要な時期に来ている。